

# 歴史都市防災研究センターによる小学生を対象とした防災教育の取り組み

— 「第5回夏休みにみんなで作る安全安心マップコンテスト」の事業報告 —

中村 琢巳\*・赤石 直美\*\*・塚本 章宏\*\*・花岡 和聖\*\*\*・村中 亮夫\*\*\*\*・吉越 昭久\*\*\*\*\*

## I. はじめに

立命館大学歴史都市防災研究センターは、文部科学省グローバル COE プログラム「歴史都市を守る『文化遺産防災学』推進拠点」をはじめとして、文化遺産の防災に関する文理融合型の研究を推進している。

先端的な学術研究とともに、当センターでは2007年より、防災教育活動の一環として、小学生を対象とした「夏休みにみんなで作る安全安心マップコンテスト」を開催してきた。マップコンテストを企画することにより、安全安心マップ作成のきっかけをつくり、防災学習推進をはかるものである。

これまでの4回にわたる本事業の成果と課題は、「京都歴史災害研究」9～12号で述べた<sup>1)</sup>。本事業の継続を通して、空間の認知・把握が大人と異なる小学生がマップ作成に取り組む有効性を確認している。さらに、小学生とともにその保護者や学校教員がともに町を調べ、語り合い、地図化を試みる作業を通して、地域社会での防犯・防災情報の共有も期待される。

本稿は、今年で第5回目を迎える安全安心マップコンテストの事業概要を報告し、防災教育活動のノウハウの蓄積をはかるものである。さらに、応募に際して回収したアンケートを分析し、安全安心マップを作成する意義と課題についても考察する。

## II. 事業概要

### 1 応募資格

本マップコンテストの応募資格は「小学生の個人またはグループ」とした。回を重ねるごとに、応募がある地域は広がりがつあり、全国の小学生全学年を対象とした。

\* 立命館大学グローバル・イノベーション研究機構・研究員  
 \*\* 立命館大学衣笠総合研究機構・研究員  
 \*\*\* 立命館大学文学部・助教  
 \*\*\*\* 立命館大学文学部・講師  
 \*\*\*\*\* 立命館大学歴史都市防災研究センター・副センター長

マップ作成は町を観察するフィールドワークを伴うため作業の安全を考慮し、また本マップコンテストの趣旨からも、いずれの場合にも20歳以上の大人が1名以上付き添うことを条件とした。

### 2 課題内容

本マップコンテストの課題は、小学校の夏休み期間を利用して、居住地周辺や通学路といった身近な地域の安全安心に関するマップを作成することとした。地震や火災、洪水などの自然災害発生時の避難経路・場所や通学時の交通安全、子どもの遊び場の安全安心、子ども／大人からみたヒヤリハットマップといったテーマの事例を示しつつも、地域の安全安心に関する内容であればテーマは自由とした。ただし、作成したマップには、具体的なタイトルをつけてもらった。対象とする地域の範囲は自由としたが、マップのサイズは「およそ画用紙二つ切以上、模造紙2枚程度以内」とした。これは本マップコンテスト実施後に作品展示を企画したこと、さらに、入賞作品の一部を国土地理院主催「全国児童生徒地図優秀作品展」へ推薦することを企画し、この応募規定に準拠したからである。

### 3 実施期間

第5回マップコンテストの作品応募期間は、2011年8月29日(月)から9月30日(金)までとした。小学生と保護者が夏休み期間を利用して地図の作成に取り組めるように、また夏休みの課題として学校に提出された作品でも本マップコンテストに応募できるように配慮した。

募集要項は事前に京都府内の全小学校に配布し、『GoGo土曜塾』(京都市教育委員会生涯学習部運営)や歴史都市防災研究センターのホームページによる広報を行った(第1回)。さらに、7月6日(水)には後援先のひとつであるKBS京都ラジオに吉越昭久教授が出演し、安全安心マップ作成の意義や本マップコンテストの企画が放送された。

#### 4 関連機関との連携

本マップコンテストの実施に際して、NTT 西日本京都支店の協賛を得て、国土地理院、コカ・コーラウエスト株式会社、株式会社パスコ、京都新聞社、KBS 京都、京都市消防局、財団法人京都市景観・まちづくりセンター、株式会社白石バイオマス、人文地理学会、立命館地理学会、NPO 災害から文化財を守る会（以上順不同）からの後援を得た。

また、京都市内の京都市立洛中小学校と京都教育大学附属京都小中学校において、マップ作成の講習会を実施した。この二校は、昨年度に安全安心マップづくりの講習会が実施され、第4回の本マップコンテストへも積極的な応募があった。そこで今年も継続して、実施するはこびとなったものである

京都教育大学附属京都小中学校では、3年生90名を対象に、社会科の授業の一環としてマップの作成が取り入れられ、計4回の講習会を実施した（5月31日、6月2日、6月8日、6月17日）。第1回目は「安全安心マップとは何か」を教室で解説した。第2回は実際に学校周

辺のフィールドワークに取り組んだ（写真1）。児童たちは少人数の班にわかれて、小学校の諸先生方、教育実習生、当センターの研究員が付き添うかたちで、皆で意見を出し合いながら、熱心に町の安全安心が観察された。第3回目はフィールドワークで調べた内容を、班ごとに模造紙に書き込み、共同でマップ作成が行われた（写真2）。最後に第4回目で、児童たちが作成したマップについて、班ごとに発表が行われた。

京都市立洛中小学校では3・4年生48名を対象として、1回の授業で、安全安心マップの概要、フィールドワークの方法、マップの作成手順にわたり説明を行った（7月19日）。児童は過年度の優秀作品に見入り、マップの作成方法など活発に質問があがった。その後、洛中小学校では3・4年生の夏休みの課題として、安全安心マップ作成が取り入れられた。それらの成果は、本マップコンテストにも積極的に応募され、多数の力作があった。



第1図 安全安心マップコンテストの特設ページ  
（歴史都市防災研究センター・ホームページ内）



写真1 危険・安全箇所を観察するフィールドワーク



写真2 班ごとの安全安心マップづくり

### Ⅲ. コンテストの結果

#### 1 応募総数

第5回の本マップコンテストには、総数93件の応募があった。応募があった地域は京都府が90件（96.8%）と大半を占め、このほか、岩手県、東京都、高知県からも1件ずつの応募があった。

#### 2 審査方法・結果

2011年10月5日に審査委員会を開催し、応募作品が厳正に審査された。審査委員は文化遺産や防災まちづくり、地理情報の専門家7名から構成される。

審査委員会では、応募作品について、①文章・図表の表現、②目的・主題の明確さ、③独自性(オリジナリティ)、④全体の構成、⑤データの充足度、という5項目を指標とした審査が行われた。その結果、最優秀賞1点、優秀賞1点、入選3点、佳作6点、(株)パスコ特別賞1点の合計12点が選ばれた(第1表)。このうち、最優秀賞、優秀賞、入選、(株)パスコ特別賞の6点について、国土地理院主催の「第15回全国児童生徒地図優秀作品展」へ応募することが決まった。

#### 3 表彰式・作品展示

表彰式は2011年10月29日(土)に歴史都市防災研究センター・カンファレンスホールにおいて行われた(写真3)。賞状の授与とともに、受賞した児童自らが作成したマップの解説を行った。入賞作品と応募作品の一部は、立命館大学歴史都市防災研究センターの展示室において、2011年12月22日(木)まで展示された(写真4)。



写真3 授賞式の模様



写真4 作品の展示(授賞式後の見学会)

第1表 受賞作品リスト(いずれも個人で応募)

| 受賞内容      | 学年 | タイトル                             |
|-----------|----|----------------------------------|
| 最優秀賞      | 4  | 私の町の安全マップ 今新在家～四条大宮              |
| 優秀賞       | 3  | ひとりでのれるよ 自転車安全・安心マップ 御所西         |
| 入選        | 4  | 京都の町 水の安心・電気の安全マップ               |
| 入選        | 3  | 家のまわりの安全、キケンマップ                  |
| 入選        | 1  | 知寄町1丁目、二葉町安全・安心マップ～交通安全、防犯、防災のまち |
| 佳作        | 3  | 防災マップ                            |
| 佳作        | 3  | 四条通り安全安心いい所マップ～四条ほり川から四条大宮まで～    |
| 佳作        | 1  | ぼくのまちマップ                         |
| 佳作        | 3  | 安心安全マップ～わたしの通学路                  |
| 佳作        | 3  | ほり川西の道路ひょうしきマップ                  |
| 佳作        | 3  | 山科音羽安全危険マップ                      |
| (株)パスコ特別賞 | 3  | 安全・安心・なんでもマップ                    |

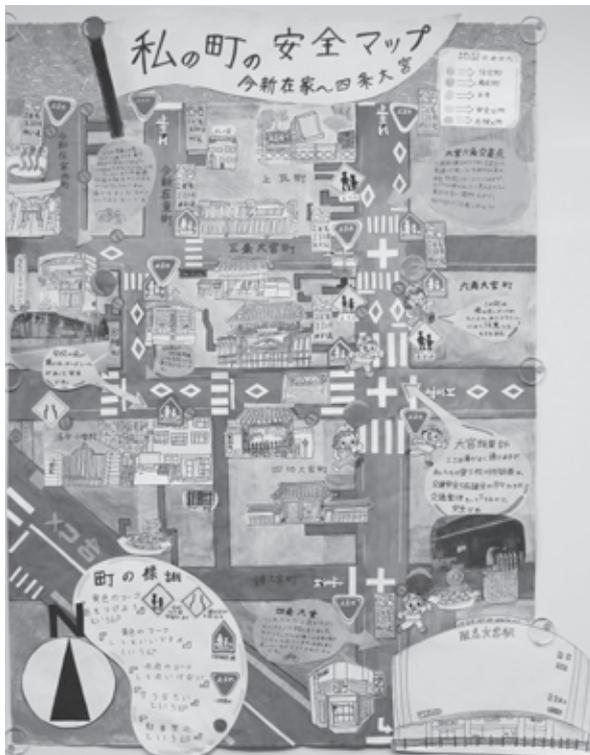


写真 5 受賞作品

(左:最優秀賞 右:優秀賞)

#### IV. アンケートにみるマップ作成の意義と問題点

本マップコンテストへの応募に際し、地域の安全安心マップ作成に関するアンケート調査票の添付を求めた。その結果、53件を回収した(回収率57.0%)。そこで本章では、この回答結果を分析することで、安全安心マップを作成する意義と課題の双方について、検討したい。

##### 1 回答者の属性

回答者である保護者の属性は、30代が29名(54.7%)、40代が21名(39.6%)、60代が1名(1.9%)、70代が1名(1.9%)、無記入が1名(1.9%)であった。また男性9名、女性が44名であり、女性が83.0%を占めた。マップ作成の講習会を行ったのが京都市内の小学校であり、回答者のほとんどが京都市内在住者であった。

##### 2 安全安心に対する関心

安全安心マップに掲載することが重要な災害リスクや情報を11項目掲げて、重要と考えるものを選択する設問をもうけた。その結果、「交通事故」(39件、有効回答数の73.6%)、「子ども110番の家」(31件、58.5%)、「避難場所」(21件、39.6%)、「声かけ・不審者」(13件、24.5%)、「交番・消防署」(10件、18.9%)、「地震」(7件、13.2%)、「火事」(6件、11.3%)、「転倒の危険」(5件、9.4%)、「ひったくり」(3件、5.7%)、「大雨・台風」(2件、3.8%)、「豪雪」(0件、0%)であった。火事・地震・台風といった自然災害よりも、交通事故や防犯に関する項目が重要視されたことがわかった。

次いで、保護者ならびに児童それぞれについて、マップ作成によって、地域の安全安心に対する関心が高まったか質問した。その結果、児童の関心は、「とても高まった」が15件(28.3%)、「やや高まった」32件(60.4%)、

「どちらでもない」3件(5.7%)、「あまり高まらなかった」2件(3.8%)、「全く高まらなかった」0件(0%)であった。保護者の関心は、「とても高まった」17件(32.1%)、「やや高まった」28件(52.8%)、「どちらでもない」6件(11.3%)、「あまり高まらなかった」1件(1.9%)、「全く高まらなかった」0件(0%)であった。保護者と児童のいずれも、関心が高まったとしたのは9割近くにのぼった。マップ作成によって、児童はもとより、作成をともに行った保護者の関心を高める効果も確認された。

### 3 児童と保護者の認識の違い

安全安心マップの作成を通じて感じた「地域の安全安心に対する保護者と児童との認識の違い」に関して質問した。

記述で多かったのは、交通ルールに関する子供の認識不足であった。例えば、「子供の交通標識の理解不足」「車両の動きなどは、子供では分からない」「京都の町の独特な車の走行方向など子供たちが知らなかった」といった回答が寄せられた。また、「子どもは相手方が交通ルールを守っていることが前提で身の安全を確保している」「子供は“信号がある”“横断歩道がある”と、みんながルールをきちんと守り、自分も守ることで、事故が起こりにくいと考えていた」という記述もあって、子供は大人と違い、不測の事故を想定していないことが指摘された。これは防犯面でも同様で、「子供は自分が事故や犯罪にまきこまれると思っていない」「子供は人通りが少なく交通量が少ない通りを安全と思っていた」「狭い道

など子供たちは面白いと冒険心で興味を示す」という記述があった。

また、大人と子供の目線の高さの違いを指摘する記述も多くみられた。例えば、「車の運転者からの目線は子供にはわからないものなので、危ないと思う場所が違うことが多くあった」という回答があった。逆に、「子どもの目線からは大人では気付かないものが見えることに驚いた」として、子供の目線だからこそ、危険個所に気づく場面もあったという。

保護者は子供たちの安全安心に関する認識が少ないと感じており、マップ作成を通して、危険個所を話し合う機会がもてたことがうかがえる。

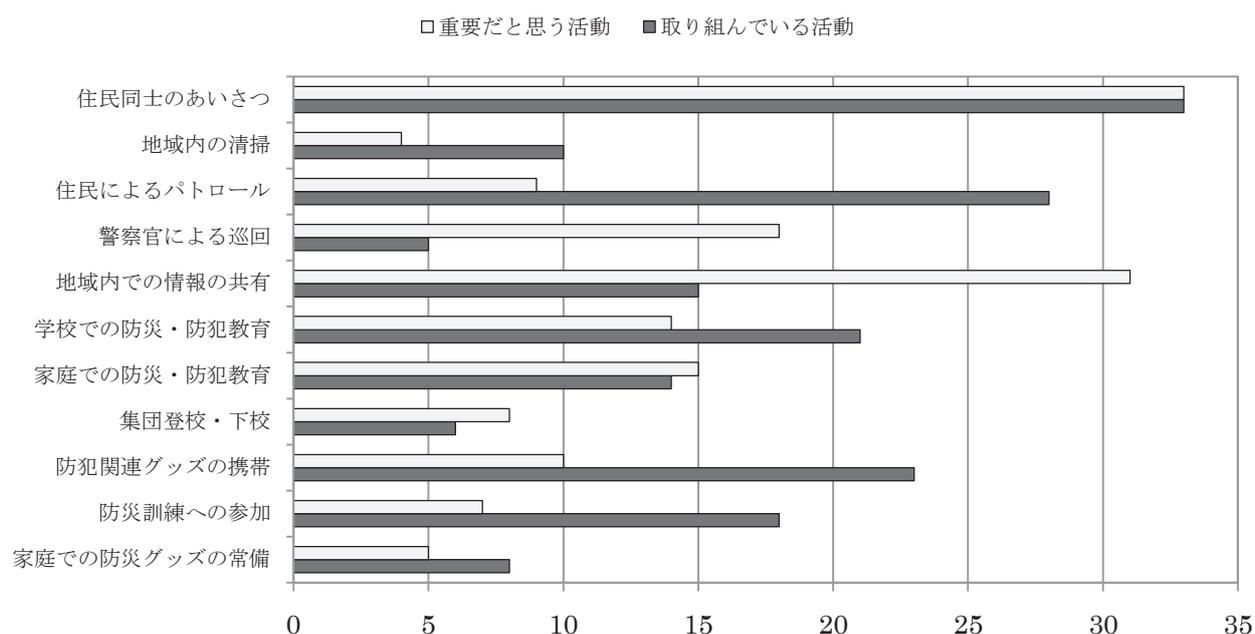
### 4 地域の安全安心への取り組みについて

地域の安全安心に関する取り組みとして、重要だと考える活動について、11項目をあげて質問した。

この集計結果を第2図で示している。「住民同士のあいさつ」が最も重要視され、かつ実際に取り組まれていることがわかる。「住民によるパトロール」「防犯関連グッズの携帯」「学校での防災・防犯教育」も活発に取り組まれていることがうかがえる。これに対して、「地域内での情報の共有」は重要な取り組みだと考えられているものの、アンケートの結果をみると、現状では十分には取り組まれていないことも判明した。

### 5 マップ作成の意義と問題点

安全安心マップ作成の意義(メリット)と問題点(デメリット)も質問した。



第2図 「地域の安全安心に関する取り組み」に関するアンケート結果

意義については、「日頃から安全安心について心構えを持つ良いきっかけになった」「子供と危険個所の情報が共有できた」といった、意識向上と情報共有に役立ったという意見が多い。

マップ作成の問題点についても、具体的な指摘があった。ひとつは、「マップ作成で安心してしまうところ。マップになっていないところでも、自己防衛の意識を持っていないといけない」「マップをつくったことによる安心感。その後の活用が大切」といった意見である。つまり、地域の危険個所の把握には限界があることを認識すべきという指摘である。さらに、「犯罪を起こす人の情報になりそう」として、安全安心マップが逆に悪用されないかという危惧が寄せられた。また、「情報が古くならないように最新化が重要」「日々状況がかわっていくが、作成時の印象が強くなり、新しい危険に気づかないおそれがある」という回答もあった。マップ作成の継続性と更新の必要性が指摘された。また、「同じ地域に住むお年寄りなどへの周知も大事」「地域住民との協力体制が不十分であるために、子供に防災・防犯について深く学ばせることに限界がある。大人がもっと地域のために学ぶ姿勢が必要」といった記述もみられた。マップ作成に、地域の協力が不可欠であるという意見である。

## V. おわりに

本稿では「第5回夏休みにみんなでつくる安全安心マップコンテスト」の事業を報告し、応募の際に回収したアンケートの分析から、安全安心マップ作成の意義と

課題についても考察した。

保護者と児童が一緒になったマップ作成は、防犯・防災意識向上と情報共有の有力な方法であることが改めて確認された。一方で、マップ作成の継続性や情報更新の必要性、地域社会の協力体制、情報の限界性の認識といった、様々な課題もアンケートから抽出された。また、安全安心マップ作成を授業で取り入れた学校からは、多数の力作が寄せられており、こうした学校教育との連携の有効性がうかがえる。今後も、学校教育や地域との様々な協力のあり方が考えられる。本事業の継続を通し、これらの課題の検討が求められるものである。

〔付記〕本事業は、立命館大学歴史都市防災研究センター主催の事業として、文部科学省グローバル COE プログラム「歴史都市を守る『文化遺産防災学』推進拠点」（代表：大窪健之）の支援を受けた。

## 注

- ①村中亮夫・大槻知史・吉越昭久「小学生を対象にした「地域の安全安心マップコンテスト」の成果と課題」、京都歴史災害研究 9、2008、21～26 頁、②花岡和聖・村中亮夫・吉越昭久「第2回夏休みにみんなで作る地域の安全安心マップコンテストの成果と課題」、京都歴史災害研究 10、2009、37～41 頁、③塚本章宏・村中亮夫・花岡和聖・吉越昭久「第3回夏休みにみんなで作る地域の安全安心マップコンテストの特徴」、京都歴史災害研究 11、2010、45～49 頁、④赤石直美・塚本章宏・花岡和聖・村中亮夫・吉越昭久「第4回夏休みにみんなでつくる安全安心マップコンテストの成果と今後の課題」、京都歴史災害研究 12、2011、43～47 頁。